



変わりゆくまちの風景

農村での高齢化・過疎化は深刻であるが、都市部でも事態は同様である▼住むのは都内のN市。都心までJRやバスを使って約1時間。武蔵野の雑木林が減ってしまったとはいえ、まだそこそこに残る。江戸中期の新田開発によって畑地と雑木林がつけられたが、これらを潰して住宅が建ち始めたのが昭和30年代。高度経済成長とともに、都心から移動する人たちや地方から上京して東京に居を構えるようになった人たちが家を見て始めた。30年代から40年代にかけて、計画性もなく、まちはつくられていった▼今もおられる第1世代はけっこうな高齢に達し、そのかなりは“独居老人”。併行して、施設に入ったり亡くなられたりしての空き家も多い。このため庭木の手入れはなされずに、中には草木が茫々と生え茂っているところもある▼こうした状況にともなう発生している問題の一つが“生物の多様化”だ。空き家にネズミが巣をつくって、これが人の住む家にまで跋扈。ネズミとともに実のなる木があるところにはハクビシンが出没する▼いつも夕方になると猫を相伴に、道端に腰かけて時間を過ごしているTさんの話し。「じつと道路を見ているとネズミやハクビシンをしょっちゅう見かけるが、最近タヌキが、しかも親子連れで歩いている。さらに先日は見たことのない動物を見かけ、ネットで調べてみたところ、どうもテンのようだ」▼昔の武蔵野に戻りつつあるような感じがしないでもない。一方では空き家を潰して更地にし、1軒あつたところに家が2、3軒建ち、若い家族が引っ越してくることも増えている。そうした家は決まって、周りはコンクリートや小石を敷き詰めて土はなく、プランターが置かれるだけ。世代交代がすすむと、まちの景色も大きく変わりそうだ。

(土着菌)